

## 監修の言葉

「肝胆脾診療エキスパートマニュアル」が発刊の運びとなりました。

本書は、東京大学消化器内科の伊佐山 浩通、吉田晴彦、椎名秀一朗の三氏により原案がつくられ、私が監修をいたしました。

消化器内科の日常は多忙をきわめます。その先生方のお役に立てるよう、企画いたしました。すなわち、多忙をきわめる日常診療のなかで、直に必要とするもの、知っていただきたいもの、最近目覚しい進歩のあったものを掲載いたしました。

近年肝胆脾の診療は、その病態および診断の領域において目覚しい進歩がございました。これらの進歩は究極治療に集約されます。例えば癌の患者さんであれば癌の5年生存率の改善という形で表れます。

また、肝胆脾の診療は、従来の“内科医”的”のイメージとは異なり、より治療介入的（Interventional）になりつつあります。患者さんに治っていただきたいという気持そのもの、すなわち、“心のこもった技術で、切らばれずに治したい”という気持であります。

現場でなければ伝わらない技術も、できうる限り紙面上で表現できるようにいたしました。

本書が、日常的および専門的診療を行っている医師のみならず、広く一般的医家の先生方にもお読みいただければと存じます。

最後になりましたが、本書の編集にかかわってくださった羊土社の鈴木美奈子様、深川正悟様に深謝いたします。

2008年9月

小俣政男

## 編集の序

～真のエキスパート足らんがために～

肝胆脾疾患に限定したマニュアルに関しては「領域が狭すぎる」とおっしゃられる向きもある。しかし、この領域はProfessionalな知識と技術が要求される分野であり、まだまだ専門家が少ない。しかも、医師の力量により患者の予後が左右されることもしばしばである。通り一遍のマニュアル本では間に合わない領域であり、真のエキスパートの育成が必要である。

私は胆脾を専門としているが、複雑な病態と患者背景に日夜悩みながら診療を行っている。治療方針の正解が教科書には書いていないことが多く、その場での病態把握と当該医師の実力、患者の状態から判断することを求められる。よりどころは病態理解とそれにあった治療戦略である。理屈がわかれば診断・治療の最大公約数が導ける。

本書は前述のような立場からマニュアルを離れた理屈の解説に重点を置いているので、後期研修医向けのマニュアルとしては時としてレベルが高すぎたり、専門的過ぎたりする部分もある。編集者としては、日常的に患者さんを現場でみているエキスパートに、あえてそのように執筆を依頼した。そのため、本書のレベルは後期研修医に留まらず、これからエキスパートを目指すすべての医師を対象とするにふさわしい内容と自負している。

繰り返しになるが、本書では病態と治療の「理屈」にこだわった編集を行った。しかも、臨床現場で実際に診療しているものにしか書けない内容を「日常臨床のポイント」として豊富に盛り込んだ。真のエキスパートを志すすべての読者への熱いメッセージを文章に込めてお届けしたい、そんな気持ちで編集した本書が、臨床現場で一人でも多くの患者さんの幸せにつながれば幸いである。

2008年9月

編者を代表して  
伊佐山 浩通